

## コ ラ ム

## 木を見て森を見ない!

20 年程まえになるが、伏見康治先生と我々学生とのやりとりの中で、我々学生の“木を見て森を見ない”という話に対して、“しかし、あえて、森を見て木を見ないことがあつてはならないことを強調したい”と言われた深さを今にして思い出す。

昨今の鉄鋼業の技術開発のめざましい発展とそのスピードの中において、“木も森も両方とも見なければ仕事にならない”ことを痛感する。そして、最近ではさらに、木の成長を予測して森の変化発展の動向を見定めなければならないし、更に森を取り巻く環境の変化も考慮しなければならない時代になつている。

春秋の講演大会の前夜に行われる共同研究問題懇談会(製鋼グループ 責任者 佐野信雄)も今秋で6回を数えるが、今秋のメインテーマは、“実験室的規模の研究と工業規模の技術開発の結合と分担”についての論議であつた。これは、大学あるいは研究所での基礎研究と企業側における工業規模での技術開発の関係を

いかに実り多いものにするかの論議である。これも、木と森の関係での配慮と反省が必要であると考え。

基礎理論を理解せずして、工業技術の進歩も、新しいプロセス技術の展開もありえない。これは、我々企業における者の自戒である。同時に日進月歩の工業技術の発展を知りながら、因われ過ぎても問題であろうが、基礎研究の推進及び発展が必要であろう。この点での企業における者の反省としては、工業の発展動向、技術的課題についての骨組みを、思想あるいは哲学として、大学あるいは研究機関の基礎研究陣に対して、もつと整理して明らかにすることが必要である。それは、工学の進歩なくして工業の発展は有り得ないし、工業の発展なくして工学の進歩は有り得ないと思うからである。

木と森の両方に目を配らなければならない忙しい時代ではあるが、木の成長と森の発展は、結局、一体の表裏であると考えが、いかがでしょうか。共研問題に出席して心に残つた一つの結論である。

(住友金属工業(株)鹿島製鉄所 丸川雄浄)

## 編集後記

▶鉄と鋼8号(6月号)をお届けします。昨年からの解説・展望など読み物記事の充実を心掛けて来ましたが、本号あたりからこれらを少し減らし、投稿論文の掲載を増しております。これは投稿論文が多くなり、投稿から掲載までに時間がかかり過ぎることにたいする対策の一つです。編集委員会の手持原稿の早期掲載をはかるため先にお願ひした規定頁数の8頁制限や58年春の特集号の中止など、いろいろな対応策を考えております。これらが効果を表すにはかなりの時間が必要です。しばらくの間御辛抱願ひます。投稿論文数は春秋の講演件数と相関があり、これの増加はわが国の鉄鋼技術の発展を示すパラメーターであり、まことに喜ばしいことです。

▶外国で本誌に掲載された論文が無断で翻訳され、出版されていると聞いております。これもわが国の鉄鋼技術の先進性を示す一つの証拠ではありますが、本協会は著作権を設定しており、翻訳・出版には本会の許可が必要です。間違つた翻訳をされては著者の利益にもならないので本会で全体を把握しておく必要性もあり、抗議を行つております。著者に許可を求めて来た場合は協会へ御一報下さい。

▶外国へ最新の情報を提供する意味で、欧文誌(Tra-

ns. ISIJ)への直接投稿を歓迎いたします。第103回講演大会(今春)に出講された中から欧文誌の英文講演概要への勧誘を357件程度、論文としての投稿勧誘を100件程度行つております。この勧誘はたまたま委員の目に止まつたものについて行つているもので、この他にも良い論文は沢山あります。早期掲載をはかる意味でも大いに欧文誌を活用していただきたいと思つております。

▶東京工業大学大岡山キャンパスでの春季講演大会は盛況の内に無事終了しました。好天に恵まれ、満開の桜の下、熱心な講演・討論が行われ大変好評だつたようです。会場を提供下さつた東工大の皆様にお礼申し上げます。講演件数664件と昨春の記録をまた更新いたしました。収容人員の大きな会場が多かつたため、あふれ出した会場も比較的少なかつたようです。従来とは異なつた方法でポスターセッションを募集したため、この開催については委員会で大いに議論をいたしました。ポスターセッションに出講下さつた方々に厚くお礼申し上げます。今後のポスターセッションのあり方については御出講下さつた方々の御意見をうかがつて参考にしたいと思つております。

(T.S.)